

『一人の笑顔のために』

緊急メッセージ

新型コロナウイルスに感染した人への差別や中傷が後を絶たないことから、文部科学省は子どもや教職員、それに地域住民に対し、差別につながる言動を行ったり、同調したりしないよう呼びかける緊急のメッセージを出しました（裏面に「地域や保護書の皆様へ」を印刷しています）。

子どもや教職員など学校関係者にも新型コロナウイルスの感染が確認され、先月下旬までに延べ84の小中学校や高校などが臨時休校していますが、一部の地域では感染者や家族が差別されたり、クラスターが発生した学校が中傷されたりする事態が起きています。

これまで、熊本県では、「ハンセン病回復者やその家族」も長い間多くの偏見と差別に苦しんでこられました。「水俣病」も同じです。この過ちを繰り返さないために、私たちにできること—それは、正しい知識と理解を持つこと。これが差別や偏見をなくす第一歩だと考えます。

感染した人や症状のある人を責めるのではなく、思いやりの気持ちを持ち、感染した人たちが早く治るよう
に励まし、治って戻ってきたときには温かく迎えることができる、人の憂いに寄り添える優しい三加和中生で
あってほしいと願っています。 数年前、私が心を動かされた小学生の作文を紹介します。

『やさしいなみだ』

「ちょっとあの車いすの人、様子がおかしい。どうして草のところで止まっているんだろう。」

車の中から、歩道に止まっている車いすの人を見て、お母さんは言いました。

信号で止まっている時のことです。どうしても変だというお母さんは、信号が青になると右折をするはずなのに、左折をして車を止めました。

「ちょっと見て来るから、待ってってね。」と言って、行ってしまいました。

私は何が変なのか分からないまま、車の中で待っていると、

「車のポケットを開くとタオルがあるでしょう。持って来てちょうだい。」

というお母さんの大きな声がして、私はタオルを持って、お母さんの所へ行きました。

お母さんは、車いすの輪にからまっている草を引っ張るように取っていました。歩道の両側には長くのびた草がいっぱい生えていました。足だけでなく、手も口もちょっと不自由そんなおじさんの顔は、あせが吹き出ととても不安そうな顔でした。

お母さんは私に、「美代ちゃん、そのタオルでおじさんの顔のあせをふいてあげて。」と言いました。

おじさんの顔は、あせだけではありません。なみだも鼻水も出ていました。私がやさしくそうっとふいてあげると、悲しそうな顔でいっしょうけんめい笑顔を作り、

「すみません。」と言いました。声がふるえていました。

私は、おじさんの顔をあまり見たらいかんと思ったので、道路の方を見ていると、ふと、

『おじさんがここで動けなくなって、何台の車が走り去ったのかな。』と考えていました。

足だけでなく手まで不自由でなかったら、きっと自分で取れたかもしれない草です。どんなに不安を感じたかと思うと、私は悲しくなりました。

「もうだいじょうぶ。」とお母さんは、服のそでであせをふきながら、おじさんの顔を見たたん、なみだぐんでしまいました。

「がんばって下さい。私の父も、足の不自由な障害者でした。」と言って、なみだをふきました。

お母さんから、おじさんにあく手を求めたのです。おじさんは、両手でお母さんの手をにぎり、泣きながら、

「ありがとう。」と言って、頭を何度も下げました。

私はこの様子を見て、私のお母さんはどこのきれいなお母さんよりも、すばらしいと思いました。

帰りの車の中で、一人幸せそうな顔をして運転しているお母さんの横顔。

私は、「やさしさって言葉じゃないのよ。」といつも言う、お母さんの言葉を思い出していました。

（出典『第18回全日本「小さな親切」作文コンクール小学生入選作品集』）

